

セツ のひん

NO.92



ひと言

奪われた時間を取り戻そう

本田 伊克（センター運営委員）

時間どろぼうが、わたしたちの日常にこつそりと忍び寄り、わたしたちの時間を奪っている。少女モモがかつて立ち向かった時間貯蓄銀行の灰色の男たちは、いまはSocial goなる社会像を掲げ、「AIに代替されない人材たれ。そのために子どもの頃から一秒の時間も無駄にせず、個別に最適化された学習を行って成果を出し続ける」と命じる。でも、時間をケチケチすること、ほんとうはぜんぜんべつとなにかをケチケチしていることにわたしたちは気づいているだろうか（ミヒヤエル・エンデ『モモ』大島かおり訳、岩波書店、1976年）。

そもそも〈時〉をいらずに切り刻むこともやめた方がよさそう。アリスが迷い込んだふしぎの国のポーシヤは、〈時〉をめちゃくちゃに切り刻んでしまう。それから〈時〉は頼みを何一つ聞いてくれなくなり、いつまで経っても6時のままでティータイムは終わらない（ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』芹生一訳、偕成社文庫、1979年）。わたしたちひとりひとりの時間にはひとつひとつ顔があり、流れがあり、リズムがある。それを機械的に切り刻むとき、わたしたちはのっぺりと平板な時間の流れに飲み込まれ、乾いた砂漠のような地点に置き去りにされてしまうだろう。

「人類の繁栄のために我こそが時を支配する！」騙されるな。わたしたちのための時間だ。わたしたちが、愛する人たちと共にする時間だ。時間どろぼうの仮面を剥がせ。

目次

ひと言	1
特集 「生きること」としての表現	
鼎談 表現の教育を問い直す	2
中森 孜郎 数見 隆生 久保 健	
「生活」「本音」を綴ること	堀籠智加枝 11
困難を抱えた少年少女たちから	
生まれる表現を見つめて	関 令子 13
子どもが歌に夢中になる時	柴田あゆみ 16
3・11から7年半	
「僕らの夏休み Project」	藤岡しほり 18
わたしの出会った先生 23	
いじめっ子の途からの脱却へ	酒井 孝夫 19
子どもと学校	
小さな幸せを見つける	石澤 梨沙 20
相談センター報告 第14回	
学校が遠い存在になっていませんか	松谷三喜子 22
おすすめ映画	
「ひまわり」	鈴木 吉雄 24
センターの動き	24

鼎談 表現の教育を問い直す

今日の子どもたちの育ちそびれの現実と

その背景にあるもの

数見 子どもたちの「育ちそびれ」が指摘されて久しいのですが、その背景や要因には様々な子どもを取り巻く変化があったし、今もあるように思います。とりわけ、近年の子どもの周りには、家庭や地域そして学校それぞれに閉塞的状况があるように思います。不登校はなかなか減少しないし、いじめの問題が深刻になっている状況などは、そのことを物語っているように思います。

この鼎談では、子どもたちが人間として成長していくということと関わって、子どもが自分を「表現」するさまざまな機会とか、あるいは学校での「表現の教育」が、疎かにされてきている状況があるのではないかということを前提にして、その現状と問題点、これからの課題について話し合ってもらいたいと思います。

まず最初に、今の子どもたちの育ちの周りには、自分を思い切っって出せない閉塞的な環境や文化状況に満ちているとか、学校でも、生活や授業までスタンダードといった「決まり通り」を当たり障りなくやらせる教育状況が広がっている、という声

も聞こえてきますが、その点についてどう考えますか？

中森 そういう問題を子どもの発達段階に即して考えると、就学前の幼児教育ではどうなっているのか。そこでは、子どもは遊びを中心として育っている。ごっこ遊びだとか、わらべ歌だとか、あるいはかけっことか、そういう遊びの文化のなかに発達の芽がある。ところが、小学校に入った途端に急に決まりきった形の教育課程の中に入ってしまう、遊び的要素を失ってしまう。問題は、その辺から始まってきているのかなと思うだけだね。

久保 幼稚園や保育園でも今、リスク・マネジメントがすごく強調されてきている。できるだけ危険なことはさせない。遊具だとか遊ぶ環境など、怪我しそうなものは全部取っ払ってしまえ！ ということになっている。ちよつとした危険を孕みながらも、その危険を乗り越える力を育むんだという発想はない。そうしなくないと考える園はあっても、保護者から危険だとか、どうしてくれるんだという責任追及だけされる。幼児教育の段階から個性のトゲみたいなのが削られていっている。その上

学校の校内研修から、音楽・美術・体育など、表現に関わる教科が姿を消している。これも『学力テスト』の影響なのかも知れない。「生きる喜び・学ぶ喜び」の大事な要素の一つに自己表現がある。その喜びの場を失った子どもたちはどうなるのだろうか。

もう一度原点に立ち返って「表現の教育を問い直す」を特集にし、現センター代表の数見隆生さん、前代表の中森孜郎さん、そして日本体育大学の久保健さんの三人で話し合っていました。

に、学校に入ってきたら、スタンダードとゼロトランススというので、がんばがらめですね。鉛筆は3本を机の左側の隅、消しゴムは此処、ノートの使い方も指定され、全クラスそうしなさいとなっている。

中森 幼児教育の段階では、歌や運動的なものにしても、ごっこ遊びの中に文化の芽があるわけなのに、今は学校教育の教えるパターンが幼児段階においてきまっています。かつて石巻のわらしこ保育園（ダンブ園長）が取り組んだ生き生きとした子どもの主体性を生かすような取り組みはなくなつたよね。

数見 遊びはまさに自己表現ですよ。そういう遊びを通して自分を出し、喧嘩もするけど仲間との関係や自我の基礎のようなものがふくらんでいく。けれど、そういう機会がきわめて乏しくなつてしまった。学校をみても、少し前は荒れる中学生など校則を破つたりすることもあつたけど、そうした社会規範を逸脱するマイナス現象も、ある種の自己表現をしていたともいえますね。

今ではそうしたはみ出すことが一切できなくなつて、多くは内に引きこもり、閉じこもるようになっていて。他者や外に自分を出さない、出せない。関係性をつくり、自分を解放できない子が増えている。これらの現象も、ある種の消極的で無自覚的な表現なのかもしれないけど……。

久保 小さい時からの「遊び」という自分の思いのままを出せる空間や場、機会が少なくなり、学校に行くとお過ぎたことをするな、勝手なことをするな、こうしなさい、ああしなさいと型にはめられちゃう。そうすると、荒れることもできない、引



きこもるしかない。自分を出さずに口を閉ざす子は、建前と本音に二重化し、使い分ける子を生み出してしまうのだと思う。学校ではいろんな決まりとかルールに抵触しないように無難に過ごしながら、自分の本音のところはどこでそれを発散したり表現したりするかというと、他者に自分がした表現の責任が問われないネットだとかSNSとかで、非常に無責任な形で周りにはわーつと広げてしまつたりする。そんな現象が生じているのではないだろうか。そういう実態も「表現」の裏側にあることをおさえなくておくと必要があると思う。

数見 確かにそういう現実が起こっているね。学校に行けないだけでなく、拒食やリストカットで自分の生きづらさを訴えサインを出す子もいるけど、自分を取り巻く背景を察知し、その管理主義的な環境に何とか適応せざるを得なくて表面的には事なかれで合わせている。けれど、本音のところでは我慢できずにネット社会のなかで無責任な形でさまざまな発信している世界があるという問題ですね。「表現」を考える時、こういう歪んだ心を子どもたちにもたらしているのも現実ですね。

白川小学校の表現の教育では何が育てられたのか

数見 ところで、1980年代半ばに中森先生が関わった白石にある白川小学校の表現教育の実践に話を移したいと思えます。私も間接的にこの学校の実践に関わつたのですが、この小学校の子どもたちのイキイキ度を他の学校の子たちと比較調査した時、きわめて白川小の子の方が高かった。当時白川小には養護教諭はいなかったし、不登校も保健室登校も全くなかった。多分いじめ問題などもなかったと思う。この本『表現にいとむ子ら』きた出版)にその調査結果を載せているけど、生活リズムや健康習慣等の生活規律や、体調や心身の活動性等の心身の自覚症状で断然良好だった。つまり、「明日早く学校へ行っ

てみんなと遊びたい」「明日の授業も楽しみだ」と思う子が多ければ、自然と生活規律がよくなり、その生活が心身に現れる。別に「健康な子どもづくり」を目的にやっていたのではなかったけれど、結果としてそういう子が育っていた。

中森

とにかく学校に行くのが楽しい。学校のなかで自分をす



べて出し切れる場があるという、そういうことが子どもを育てる。白川小の場合、元々そうだったのではなくて、あの学校に安藤校長が赴任して来て、遠藤惟也さんもいて、それから僕なども学校づくりに参加してやっていく中で子どもが段々そういうふうになっ

数見

表現活動がどうして子どもを変えるのかという問題です。

私の分野、例えば保健室登校の子どもにかかわった養護教諭の実践でも、子どもが変わっていった事例には、たいがいその子の心のうちを解放するための何らかの表現活動に取り組ませ、外に向けて自己を表出させ、存在を他者から容認される取り組みをしている。自分史を書かせることであったり、音楽や太鼓であったり、詩やシナリオであったり、それが仲間や他者に伝わり、共感を得、自己肯定感や自信に繋がっていくというもの。表現というのは、他者との関係性を生み出すもの、だと思うのです。

中森

子どもの中に「こんなことしたい」という欲求はあるん

だけれども、それが教育の中で殺されちゃっているというか、そうした欲求を刺激することで表にばっと出せるか出せないか、その違いなんですよ。

白川小の中で一番僕の中に残っているのは、2年生の三点倒立で、クラスで一番やんちゃな手に負えない子が、これをやっていく中でできるようになっていき、それを後になってこういうふうにやりましたという絵を書いて先生に持ってきて、それを読んで先生がびっくりしてしまう。つまり一人の子もが逆さになっていく動作を全部絵に描いて、先生方も「あの子がこんなに集中して演技をやった」とびっくりしてしまう。そういうことが生まれてくるわけですよ。表現というのは一緒に子どもと教師が追求して、より質の高いものを創りだしていく。その子なりその子なりの演技を創り出していく。その中で学校が変わっていく。クラスが変わり、学校が変わっていく。そのところがものすごく大事ななと思うんだけどね。

久保

昔、中森さんたちが雑誌『ひと』誌上で行った座談会「

表現することは生きること」に、明星学園で依田節夫さんの実践した側転の授業が載っていて、当初はうまく側転のできる子は、それを描いた絵も上手だと思っていたけど、よく見るとちよつと動きと手の位置が違う。側転したときにどう手を着いて、手の上にどう体の重さが乗ったかとか、手が離れたときの感じの絵は、ぎこちない側転をしていた子の方がずっと正しい。やっぱり身体をくぐり抜けたものが絵に出てくる。白川小の子の絵も、逆立ちでなぜあんなに足が細いんだろうと思うと、頭でドシツと立っているその土台のところに対する感じがすごくよく出ている気がするね。

数見

生活体験だよ。苦労してできた感動があるとか、実感が

が残っていることが、表現としては強調されて出てくる。

表現の教育を衰退させている背景にあるものは何か

数見 しかし今、子どもたちが引きこもり、閉塞的になってしまっている教育状況の問題として、どういことがそうさせているのか。学習指導要領の問題も含めて今どういう方向に動いているのか、どんな子どもを育てるのかの展望がなく、感動や充実感の伴わない、当たり障りのない、のつぺらぼうな学校にさせられてしまっている状況を再考しなければならない。自分の個性を発揮できない教師が増えていて、個性的な子どもが育たない状況になっているといわれる現状をどうとらえればいいか。

久保 この夏、長野で行われた全国教研に参加してきたけど、



その中で、ある教員が教科書検定に付される新しい道徳教科書の内容分析をしたところ、圧倒的に多いのは、「友情」とか「がんばれ」とかのテーマに合わせて創作した作品だということでした。ということは、それを題材にして授業をやるという「自由」意見を言ったとしても、結論が先にあるのでそこに流れていくしかない。リアリティのないそんな題材での授業で、疑問を挟んだりしたらはじかれてしまうし、結論が見え見え、そういう教育体制になっている。道徳だから一番典型的だと思うけど、他教科でもそうで、アクティブ・ラーニングといった「主体的で、対話のある」とか「課題解決のために分かったことを人に伝えよう」とか「課題解決が行っているけど、指導要領枠の中でしか自由がなく、そこからはみ出さない子が育てられようとしている。そういう状況だから表現も育たない。

ら表現も育たない。

数見 最近、教育って何だっけ改めて考えるために北海道の家庭学校、教護院なんだけど、そこで谷昌恒さんが行った実践書に改めて目を通してると、いわゆる学習は午前中だけで、一日の半分以上を汗水たらして働いて、木を切ったり作物を植えたり花を咲かせたり、牛や様々な生きものを育てて関わったり、そしていろんな自分が体験したことをもとにして作文を書かせて、礼拝堂で書いたものをみんなの前で発表し合うということをしている。そしてそれに校長や教員からコメントをもらう教育活動をしている。決まりきった徳目を頭だけで受け入れていくようなものでない、自分の具体的な体験をもとに身になったこと考えたこと実感したことをもとに交流し、共有し合うというの、きつと自信になるし、生きることに繋がるよね。ところが今の子育ての状況は、自分というものを精一杯出すというような生活体験がなく、閉塞状況をもたらしている。

中森 確かに、今の子には家庭の手伝いにしても労働や生産に関わることはない。学校でも狭義の「学力」中心の教育になっていて、自然とか社会と具体的にかかわる体験や活動もきわめて乏しくなっている。そうした状況が子どもの人間としての育ちを乏しくしている。

ただ、授業として表現の問題を考えると、表現は子どもが自分の中にあるものをただ外に出すというのではなく、教材、つまり文化が介在しているのです。音楽にしてもスポーツにしてもね。その文化と子どもが格闘する過程で自分の内側に眠っている欲求が巡り会って、その文化の質を自分の中に取り込んでいく。そこに自分なりの表現が生まれてくる。それには相当時間がかかるし、その時にどういう関係を子ども同士に結び合わせながら、共有の文化にしていくか、ということが大事なね。その辺のプロセスが大事なのに、今の教育の中では点数で競わ

せ、落ちこぼれていく子どもたちの問題に無頓着でいる。大事な質のある課題にじっくりと時間をかけて取り組み、その過程ですべての子どもが本当に自分のものにしていったとき表現になっていく。その辺のプロセスをどういうふうにか教師が組織していくか、そこで教師の指導力が問われてくる。

青葉女子学園での表現教育の実践から言えること

教見 ところで、青葉女子学園での取り組みはどうだったのか。この学園の生徒らは、小さいころから本来の育ちに恵まれないやむを得ずこういう施設に入ったのだろうけれど、表現を中心とした学びを体験し、取り組んでいく中で大きく変わっていくということがあったと思うのだけど、中森先生、その辺の話をしてもらえますか。

中森 一番最初に生徒に「人間の身体は固体？それとも液体？」という問いかけから始めて、身体を揺すってみる。そういう教師からの考えてもみなかった問いかけによって、はじめて子どもたちは思考し、身体を揺すっていく中で驚くわけですよ。人間の身体ってこんな不思議なものなんだ、と。すると、子どもは次の授業は何をやるんだろうと期待することになる。そして行くとき楽しみに待っていてくれる。そういう関係になっていく。それにはやはり教師の側の教材解釈、教材研究というのが一番大事だし、基礎の基礎なのね。その意味でこの学園が良かったのは、この教材で何時間というふうに決まっているわけではないので、たっぷり時間をかけてくれた。一つ一つの教材を精選して、それにうんと時間をかけて、問いと答えというものの「問」を共に探求し、新しい発見があつてそれを共有し、そしてまた新たな問いを探っていく。そういう基本的な事柄をやってきた。

教見 子どもを主体にして、たっぷり時間をかけて学びを組織していくことの大事さはわかるんだけど、そのことは認識の教

育も同じですよ。だけど表現の教育では、ある程度自分のものにした上で、その学びをもう一度外に表現していく。言うなれば自分のイメージしたもの、受け入れたものをアウトプットして、仲間と響きあつたり、心を合わせたりしながら他者とか観ている人に発信していく。そこに教育性というか、自分を成長させるようなものがあるのではないですか。

中森 そうそう。だから太鼓なら太鼓を教えても、やっぱり基本からきちんと教えていく中で段々子どもが成長していく。そして発表会をする。太鼓一つをとってもそうだし、詩の朗読にしても身体を使つての発声から始まりながら、一つひとつの詩を朗読し合つて、最後は発表の場を設けていく。そういう中で、親や見に来ている人たちの反応とか、そういう交流や緊張感の中で、子どもたちは如何に文化が自分のものになっていくかをちゃんと認識できるようにしていく。そういう過程があるわけね。

久保 文化とか芸術を介在したそのレベルの表現のもつとベースには、やっぱり人間が生きているということに対する認識と表出というか、生きていること自体に直接触れて心動かされるというものがあると思うんです。制野さんが東松島で被災した子どもたちと学校が再開した直後から体育で取り組んだのは、「生きている証拠探し」の授業だった。行政はすぐ学力形成だと言いつ出したけど、しばらくはどんな授業をやつていいかわからなかった中で、心臓の音を聴いてみようとか、お互いに触れてあつたかいなあとかね。それをやらないと、体育の授業をやる気に教師もなれなかつたし、子どもたちもそうだったと後で言っている。やっぱり原点のところには、そういう人間が生きていることそのものと触れ合うということがあつて、それをベースにしなが、段々と文化や教材との関係での認識と表現の教育に進んでいくのではないかなという感じがするんです。

数見

中森先生は、青葉女子学園の実践について書いた本の中で、「表現は生きること」だと書かれていますね。この学園に來ている子たちはすごくストレスを抱えていると思うのだけれど、それが自分を外に出すような表現的活動によって解放されていったということなのだろうか、その点についてもう少し詳しく話してもらえますか。

中森

人間は何かの文化を通して自分を表現し、生きていくわけですよ。だから、本当に表現する・演じるということは、音楽でもスポーツでもプレーなんですよね。プレー＝演じるということとは、それを通して自分の人生を生きているということになる。演技者というのは、音楽家にとっても何にしても、演じているときは自分の人生そのものなんです。人生で一番の自己表現をしている。そのことで他者とながっているわけですよ。人間が生きて行くということは、たえず文化を持つことによってお互いに演じ合って、それを共有し合ってもともに生きていくことができると思っています。

子どもたちは確かにご飯を食べたり、寝たりして生きているんだけど、人間として生きるということは、人と人との間の人間として、また文化を共有しながら共に生きているということに本質があり、そのことがすごく大事なことなんです。そうした文化的な生き方は、非常にクリエイティブな生き方に向かっているのです。青葉女子学園の子たちにもその可能性を感じました。

久保

文化や芸術とかを通して自分を表現するとか、そこに入り込むという体験がないと、自分一人だけの限られた逃げ出しようのない、私の人生どうせこんなものという中でしか生きていけない。だけど、文化や芸術を共有すると、踊りもそうだけど、それを創ってきた、あるいは伝えてきた多くの人がやってきたものと触れ合うわけだね。それを自分の中に取り込みながら、

自分をそこで表現する。ある意味で自分にとってあり得たかもしれない、これからあり得るかもわからない人生と触れ合うことができるというのが、表現であり演技なんだと思う。自分の生活を閉じたものとせず、いろんな生きる可能性みたいなものを掘れば掘るほどいろんなことが体験できる。そこに大きな意味があるんじゃないかなと青葉女子学園の実践にふれて感じます。

民舞という表現教育に込められたものは

何だったのか

数見

自分の肯定的な生き方に繋がるような教育活動が、こうした子たちにももっと早くからなされていけば、もっと違った人生を前向きに開いていけたのではないかと思うんだけど、それがなされなかった。こうした子にとって閉塞的だった教育状況が、最近の多くの学校に広がってきている気がして、非常に危機を感じるわけだけど、だからこそ、学びを通して自分を思い切って表現し、仲間とつながり合える教育が必要なんだと思うのね。

ところで、制野さんのいた中学校で「生きている証拠探し」のような授業をした後、大森御神楽という民舞に取り組んだのは何だったのか。久保さんが提案者だったと聞いているのだけど、震災後親を亡くし心が折れている子どもたちに体育で「よさこいソーラン」ではなく御神楽を躍らせる意図は何だったのですか。

久保

大森御神楽がすべてとはいわない。南中ソーランについては、稚内南中の先生達と話したことがあるんだけど、あれはあの時代の曲がり角だった稚内南中の学校づくりをしていく上ですごく大きな意味をもっていた文化だというのがね。民俗芸能だなんて思っていないですよ。だからいろんな文化がいろんな

可能性をもっているとは思うのですけど、でも制野さんの鳴瀬未来中の場合は、震災という重い生活体験をずっと抱えていて、まだ震災体験を語り合えない子どもたちが、民舞に取り組む過程で自分を表現しながら関係性が深まり、その後の震災経験をともに命とは何かを追求した「命の授業」の中で自己体験をいろいろ語れるようになっていった。自分の内面を語れないくらいに打ちひしがれていたときに、難しい踊りを踊らされ、しかしそれに徐々にまよっていき、不思議と自分の踊っている世界に入っていた。論理的に説明はできないけれど、彼女等の中で、震災体験と、自分が生きてきた中学2年までの人生と、今踊っている御神楽と、自分たちこれから先どうなっていくのだろうみたいなことが、一人ひとりの子どもたちの中に生命力みたいな形で入り込んだという気がする。今、あの子どもたちは大学生になっているけれど、グループを作って震災を伝える活動とか、踊りのグループをつくって岩手の踊りだけ自分たちのところで根付かせようと取り組んでいる。こういう活動には、不思議と苦勞した子とか重い生活体験をした子が反応するのです。

数見 制野さんの「命の授業」を何回か参観したんだけど、御神楽の授業に取り組む過程で、許し合え、何でも心の内を共有し合える関係ができたんだなという思いと同時に、あの御神楽という文化には「鎮魂」の心があることを踊り込む過程で感じ取り、震災との共感というか、はまり込んでいくものがあつたのかなとも感じたのです。

青葉女子学園でも大森御神楽やりましたよね。どうして青葉女子学園の施設の子どもに教えたのか。心の様々な課題を抱えてこの学園に入所している子たちに対して、こうした民舞にどうして取り組ませたのか。ただ熱中し、夢中になって心の解放をさせたかったということなのか、単なる心の解放

というようなものでもないような気もするし、何か文化的な質の追究を意図しているような気がするのだけど。

中森 最初はこんなのもつても踊れないよ、とみんな思っていた。だけど変わっていきんです。踊って汗を流しているとだんだん自信がついてきて、そしてかなり踊り込んだころになつてくると、昔の岩手の人はどういう訳でこれを踊ったのだろうかと問う余裕が出てくるんですね。そして、当時のその人たちの生き方と自分が今おかれている環境の中で生きていくことが結びついていく状況が生じてくるのです。つまり、踊りの形を覚えたところで終わったらおしまいなんですね。踊り込むということが大事で、そこに出てくる余裕が、踊りを客観化し、生きることと結びついてくるんです。

数見 踊りとかあらゆる文化は、まず型から入って行くけれど、ある程度自分のものになつて行くことで、自分の表現にしようと思つたときに、こうした文化がどういう時代に、誰がどうして踊つたのか、生み出したのか、ということが気になり、その思い、民衆の願いといったものを意識化して、自分の表現・型に生かしていくということなのですね。

久保 踊り込んでいくと、踊りのどこが好きというのが人によって違ってくる。沈み込んでふわーとなるとこが好きとか、扇を返すところがいいとか、二人組で肩越しにパートナーが見え



るところがいいとか、それぞれお気に入りのところがでてる。

もともと御神楽というのは、くたびれ果てるまで働き、また翌日早起きしなければならぬという生活をしている民衆が、わざわざ夜に集まって、あんなに疲れる踊りをなぜやったのだらうかと思うと、そこでそうすることでしか次の日をもた生きる元気がもらえないという現実があったと思う。だから決して疲れさせる踊りではない。激しい踊りなんだけど、どこかに自分を奮い立たせるといふか、生きている実感を味あわせてくれる。しかも綺麗な思いをさせてくれる。その踊っているときの身体実感の綺麗な思いとはどういうことなのかは難しいんだけど、重さがふわーとなるといふか、踊っているときに感じる「あつ、ちよつといい感じ」というのが何力所かにある。観てた人から衣装を着けててふわーというのが綺麗に見える、誉められたり素敵だったねと言われるのと、自分の中の「いい感じ」という実感みたいなのが繋がると、生きがいになってくる。

表現の教育と認識の教育の関係および

学校教育全体の教育課程をどう考えるか

中森 小学校の場合は、ほとんど一人の先生がいろんな教科の授業をしますよね。すると得意な教科と不得意な教科がありますよね。白川小でも、中年の女性の先生は、自分自身はその演技、例えば側転などはできないわけ。できないんだけど、あるレベルまで子どもたちを食いついてこさせることは可能なのです。附属小学校でも理科専科の先生が、音楽の合唱の指揮をやる。自分はろくに音楽などできなくても合唱指導ができた。子どもたちに教えてもらいながらやっていくという中で、創っていくわけね。あれはすごいなあと思う。そして

それが子どもたちにとつてもすくしい勉強になった。先生にとつてもいい勉強になった。自分が得意なものだけを教えるのではなく、苦手なことであっても、子どもたちは教師の取り組み方によって子ども自身もどんどん学んでいく。教師は逆に子どもから教わりながらやると教師と子どもの

関係性が生まれ、高まっていく。表現とはそういう教科なのね。算数とか国語ではそうはいかないように思うけど。

数見

認識の教育と表現の教育と両面がでてきたんだけど、これらは無関係ではないでしょう。認識というかいろんなことを感じたり考えたりすることが表現に繋がっていくし、表現することでもまた認識が高まっていくこともある。そのへんの関係はどう捉えたらいいか。その順序性みたいなものを考えてみたいと思います。

認識の教育というのはインプットすることが中心ですよ。新しいことを知ったり覚えたりすることを基本に、考え、理解し、納得することですが、表現というのは、自分のイメージや思いを外に向かって言語・文字・からだ・音や絵などで示し、発信することですよ。かつての綴り方教育なども、自分の日常生活で感じた思いを発信する表現教育だったと思うんです。身体表現や音楽・美術だけが表現教育なのではないと思うのですがその点どうでしょうか。

中森 結局、算数とか理科とか社会は、数や自然や社会の科学がある。国語というのは、小説を読むとか読解力を育てると



いうのがあるけど、もう一つは言語表現ですよ。国語の場
合はそれが強いのではないでしょうかね。特に生活綴り方的
なものなんかはまさに表現だし、言語表現としての朗読など
もある。教科によって違っている。

日本の教育はテストのための教育、全国学力テストとか受
験のためのテスト、そのための教育というようになってしまっ
ていて、そうするとどうしても受験科目が中心になり、記憶
するということが重視されてしまう。従って表現科目の方は
軽視されるんだけど、しかし軽視されたことによって逆に拘
束されない、自由さえあるという状況になっている。

数見 大切なことは、もつと子どもたちの生活経験を豊かにす
ることだと思っただけで、そこがきわめてゆがめられてし
まっている。レーチェル・カーソンの言う「センス・オブ・
ワンダー」で、自然や生き物ともつと触れあったり、社会や
環境と触れ合う体験を経て初めて様々なイマジネーションが
豊かになり、思考力も高まるわけでしょう。そういう意味で
は子どもの生活をもつと家庭や学校も含め全面的に生き生き
したものにしなければいけないのに、そこがきわめて貧弱に
させられてしまっている。

中森 学校というのが一つの組織として本当に生き生きと動い
てるかということが大事なんですよ。そのことで思い出す
のは、今から40年以上も前、私が附属小学校の校長だった時に
年間行事を整理し、全校合唱の会と体育大会に絞ったこと
です。合唱の会は午前は学級合唱、午後は学年合唱と全校合唱
をした。半年も前から曲を選び、より質の高い合唱を目指し
て練習を積み重ねていきました。それだけに当日は子どもた
ちも親たちも感動に次ぐ感動の一日になりました。そうした
努力の過程で、学校の雰囲気も一変していったことを思い起
こします。その会は、40年以上も続いています。

わが国の代表的な教育学者である太田堯さんはつい最近
生命誌研究者の中村桂子さんの対談『百歳の遺言―いのち
から「教育」を考える』（藤原書店）の中で、これまでの学校
教育では、国・社・数・理などが中心教科とされて、音・美・
体は周辺教科に位置づけられてきたが、これからは少なくとも
も小学校ではそれを逆転し、つづり方、音楽・美術・体育を
中心教科に据えるべきだと提案しています。傾聴すべき提案
だと私は考えています。国・社・数・理など認識の教育を軽
視するのではなく、発達段階を考えるべきだと思っただけで
子どもたちの中に表現文化が根付いた時、学校は生気にあふ
れるものとなり、それが認識教科の授業でも、互いに心を開
き意見の出し合える関係を育むからです。

最近いじめが学校で問題になり、その対策が課題視され
ているけれど、みんなで文化を創っていく学校づくりがなされ
ていったときに、初めて学校は生き生きとし、生命力が生まれ
お互いを高め合える関係ができていくと思うのです。

数見 今日長時間ありがとうございました。顔ぶれの関係も
あって、少々民舞とか、体育的表現の教育に傾斜した座談会
になりましたが、今日の教育の大きな課題の一つとして、子
どもたちが人間として生きていく上で、最も大事だと言える
「自分という存在を思い切っって出せる」そして「そのことを仲
間と心底から交流し共有しえる」ということができな環境
に置かれているのではないかといいました。音・美・体
といった基礎的表現教育の見直しをもしつつ、他方で「表現」
を子どもの権利条約の意見表明権の観点で捉え、あらゆる教
科で自己主張しうる人格形成の課題の立場からも見直したい
と思います。

今日は長時間ありがとうございました。

「生活」「本音」を綴ること

堀籠 智加枝

子どもたちに日記や詩を書かせています。なぜ、「日記を書かせているのか。」と聞かれることが多くなりました。「なぜ書かせるのか」、自分にとって書くことが「生きていくこと」で、書くことが考えることだからでしょうか。書くことで考え、生きていく。そして、書いたものが生きた証になっていく。そんな、循環の中に「書くこと」があるように感じます。

「生活」を見つめさせたい、「本音」を表現させたいと思って取り組んでいます。「日記・詩・作文」はその表現の形式です。

なぜ、「生活」を書かせるのか。それは、「自分の存在」を見つめることになるからだと思います。人は、一人では生きていけないので、生活を書くこと必然的に自分に関わる人や社会を見つめることになります。「生活」を書くことは「生きること」そのものを見つめ、「生きていく自分」を綴ることになるのだと思います。(以下、名前は仮名)

① 生活を書く／本音を書く

愛さんはとても元気な女の子です。弟と仲良くです。弟も元気がいいので、「先生に怒られ

ていないかな。」と心配して、時々元気がなくなりません。理由を聞くと「自分が怒られたような気持ちになる。」と話してくれました。そんな愛さんの本音を聞いて、愛さんがんばれ！と励ましてあげたくくなります。見守るしかできないけど、嬉しい気持ちも心配する思いも受け止めて、「それでいいんだよ。大丈夫だよ。」と赤ペンで励まします。「弟は、外で一緒に遊んでくれるから、大好き。」と話してくれます。

おつかれ

愛

今日、3人で児童館から家まで歩いて行きました。弟とはじめて歩きます。弟はうるさいので、だいたいぶかなあと思っていました。安全に歩きました。家までもうちょっとという所にきた時、弟が、

「つかれた。もう歩きたくない。」

と言いました。(ええ、もうちょっとだからがんばってよ。)と思いましたが、それで、弟のものも全部持ってあげました。そして、何とか家につきました。つかれたし、たいへんでした。

うんてい

愛

わたしは、昼休みにうんていをしてきいごまで行けたので、うれしかったです。でもいっぱいやりすぎて、まめが二つできました。先生に、

「まめが二つ。食べられるね。」

と言われました。(たしかに。)と思って、くすくすわらいました。

そして、給食で豆が出ました。わたしは、(本当に豆が出た。)と思いました。

日記を宿題にする時は、書き方を教えることはもちろんですが、嬉しいことだけでなく、心配したことや辛かったことなど、「心が揺れたこと」を書いていいことを子どもたちに話します。恵子さんは、何気ない日常の中で不安になった気持ちを素直に書きました。

どこに行つたの

恵子

今日、朝会がありました。わたしは朝会が終わってから先生にけんこうかんさつ板をたのまれました。わたしは、

「はい。」

と言いました。そして、けんこうかんさつ板をおいて、3年生が来るのをろうかであちましました。でも、おそくておそくて(もう、教室に帰っちゃつたのかなあ。)と思いました。

そして、しばらくして3年生が来ました。幸ちゃんが、

「おいで。」

と言ってくれて、安心しました。

わたしは教室にもどってから、ないてしまいました。先生が、

「どうしたの。さつき、一人ぼっちになったから。」

と言いました。わたしは、

「うん。」

と言いました。とても、こわかったです。

由美さんには、由美さんのお話をなかなか聞いてくれないお姉さんがいます。その関わりを「妹もらしくじゃない」と詩に表しました。「楽じゃないよね……。」と共感しながら読んでいくと、「でも、優しくする時もあるから。」と、お姉さんとの関係を振り返ります。大変な中にも、一つの見方だけでなく、いろいろな見方をしていった由美さんです。

その思いを受け止めたいです。「妹も楽じゃない。」と詩を書く時ぐらい、本音を吐いてもいいと思います。本音を書くことで、また「お姉ちゃんのやさしいところ」も見つけることができるのだと思います。

妹もらしくじゃない 由美

私はお姉ちゃんになんかいいもなんかいもガリとかかみをひっぱられたりして、もう私は（妹もらしくじゃない。）と思いました。

でも、お姉ちゃんがやさしくする時もあるから、（やっぱりやめよう。）と思いました。

② 生活を書くく人との関わりを書くく

お母さんが大好きなのに、「弟ばかりかわいがるから嫌。」と言っていた陽子さん。素直

に甘えられずにいました。妹が生まれて、その誕生からどんどん成長する様子を、毎日のように綴ります。妹のお世話を手伝い、詩に書きま

す。お母さんとの会話が増え、優しい気持ちで妹や弟に接していることが伝わってきます。命の誕生に関わり、命が育っていく様子を見つめることは子どもたちにとって大切な体験だと思います。同時に、「自分もこうやって育ててもらったんだ。」と分かるのだと思います。

3月に、東日本大震災の時どのようにして自分たちの命が守られたのか、家族に聞き取りをし作文に書きました。

もののおむつがえ 陽子

朝と夜にももののおむつがえをしました。

ママが、

「おむつかえてみる？」

と言いました。私が、

「うん。」

と言いました。かえてみました。

ももがバタバタ動くので、おむつをかえにくかったです。

でも、かえた後はももに、

「あうくんぐ。」

と言われました。

「ありがとう。」

と言われているようでした。

東日本大震災 陽子

「東日本大震災のことについて、お家で聞いてきてください。」

と先生に言われました。

私は、家に帰ってママに聞きました。私は、「ママ震災のこと教えて。宿題なんだ。」と言いました。ママは、

「いいよ。」と言ってくれました。ママが、「あの時は、さいしよにけいたいのきん急じしんそくほうがなって、その後長くゆれたんだ。1回止まったと思ったら、またそこそこ強いゆれが何回もあったんだよ。道路の信号も全部きえて、お店も電気が消えて真っ暗でね。道路がこわれて段差になっていたんだ。けいたいもつながらなくなつたし、ガソリンが買えなくなつて買う時は、すごく並んだんだよ。陽子も香奈ぐらいで、香奈は今のものもぐらいいだつたんだよ。あの時は、みんなであたわっていたんだよ。大変だった。」と言いました。

次に、じしんの後どんな生活をしていたか聞きました。ママは、

「料理はね、ガスコンロだったんだよ。りんちゃんのお父さんからはつ電気をかりておふろに入ったんだよ。洗たくもばあばと二人で手でしたんだよ。よしんがおさまるまで、茶の間でみんなで寝ていたんだよ。てい電の間、ガソリンがなかったから、パパとママは休んでいたんだよ。早寝早起きだったんだよ。」と言っていました。

さいごに、震災の時の気持ちを聞いてみました。ママは、

「とにかく、家族のことが心配だった。いつふつうの生活にもどれるのかなあと思った。」と言っていました。じいじは、

「大変なことが起きたなあと思った。」

「言っていました。パパは、家族のことがしんばいだった。と言っていました。ぴいちゃんは、」

「どうしようと思っただ。」

と言っていました。

私は、お母さんの話を聞いて大変だったんだなあと思いました。これからは、おきてほしくないです。

孝さんは音読が上手で、社会のことにも興味があつて、負けず嫌いな男の子です。そんな孝さんは、友達と上手く関わる事ができずにごし暴れたり、恐い言葉を口走つてしまつたりしていました。孝さんと話し、「みんなと関わりたい」「みんなに認めてほしい」という気持ちを確かめ、後は孝さんの中にある優しさを発見し日記に綴つて紹介していきました。鋭い視点を紹介すると、「すごいね！」とみんなから言われて、友達のごきにも目が向くようになる孝さんでした。人は、人と関わる中で自分を発見できるのだと思いました。

わっ

孝

ぼくがそうじから帰ってきたら、かいだんのおどり場で先生がいて、

「先生何しているんですか。」

と言おうとしたら、

「わっ。」

と先生が言いました。見てみると、先生はかいだんにすわっていました。ぼくは、

「わあ、びびったあ。」

と後ろに下がりがながら言いました。

「先生、びつくりしましたよ。」
と言いました。先生は、おもしろそうに笑っていました。

アナウンサーになったら 孝

「孝君、アナウンサーになったら？」

と先生に言われた。

突然言われた。

ぼくは、

困難を抱えた少年少女たちから 生まれる表現を見つめて・・・

関 令 子

少女たちとの出会い

2015年3月、春日先生からお電話をいただきました。それは、「青葉女子学園で美術の授業をしたくないかい？」というお話でした。授業をもう一度したいなあと思っていたので、即答で承諾しました。

私が2年を残して教職を退職したのは、2013年3月です。震災から改めて人生を考えるようになり、退職直後からテキスタイル創作を始めました。フェルトのワークショップをしたり、作品の発表をしたり、活動が動き始めていた時でしたが、何故か、授業がしたい、と

「は、はあ。」

と言つて、心の中で（月しゅう何万円かな？）と思つた。先生には、

「声が大いし、はつきりすらすら読めていから。」

と言われて、心の中では（ふくん。）と思つた。

もう一回考えてみて、（その夢もいいな。）と思つた。

（鳴瀬小）

いう思いがあつたのです。

早速4月から月2回、女子の少年院、青葉女子学園での授業が始まりました。名字だけは名札で分かりますが、年齢も出身地も、もちろん罪状も分からない、いつ出院するか、次回もいるかどうかさえも分からない少女たちとの授業です。しかも、できあがつた作品を少女たちは持ち帰ることもできず、ただ記憶だけが残る授業です。これまでに経験したことのない条件とさまざまな困難を抱えた少女たちとの授業には強い緊張感もありましたが、とにかく真つ直ぐな気持ちで臨みました。

題材と用具

授業は、水彩画を中心に水墨画、デザイン、羊毛フェルトも行います。個人ごとに入退が異なり、題材に取りかかる時期、進度、題材も違ってくるので個別指導が基本です。

初めに、水彩入門として、「どうぶつのさんぽ」で用具の使い方、「点から面へ」で混色や点描表現などをしてから水墨画とモダンテクニクの融合的表現にと入ります。季節を感じる花や心に残っている思い出を墨や絵の具で描き、冬を迎えるころには、羊毛から布を創る彫塑に近い表現も行います。

忘れられない少女の言葉と表現

一年目のことでした。まもなく出院だったのでしょうか。ある日、Hさんが、こんなことを言うのです。

「わたし、関先生に感謝してるんだよ。なんでかっていうと、先生は分からない言葉、例えば片仮名の言葉を言うでしょう。それで、わたしは分からないから、どういう意味だろうって図書室で国語辞典を借りて調べようになったのね。そしたら、調べた言葉の意味も分かったけれど、辞典にはいろんな言葉が載ってるから、それを読むと面白いんだよね。で、考えてみたら、なんて自分は言葉を知らなかつたんだろうって思ってた。もつといろいろな言葉を知ってたから、自分の感情も言葉で言えるから、おかしなこともしなかつたかもしれないってね。それで今は毎日辞典を読んで、国語辞典が愛読書になってるんです。関先生のおかげです。」

こんな素敵な言葉をもらえるとは、全く予想外でした。ただただ驚き、目頭が熱くなりました。

また、この少女の「お菓子の思い出」という作品も忘れられません。ある時、実物のお菓子を持参して、これを題材に、と担当者に見せたら、「教室にお菓子は持ち込めないので写真に撮りましょう」と言われ、節制した生活なので納得しながらも、写真のお菓子を描いてみましょうがないので、「好きなお菓子を描いてください」ということになりました。彼女は、「死ぬほどチョコが好き。」と言いながら、一口かじった板チョコを描き、そばにミスタードーナツもいろいろ、それはそれは気持ちのこもった作品になりました。他の少女は、カモメのたまごというお菓子和チョコパフェの組み合わせで、家族旅行の思い出を、あるいは、小さい頃に通った近所の駄菓子屋の風景など、どれもこれも宝物を描いたような作品でした。

少年たちとの出会い

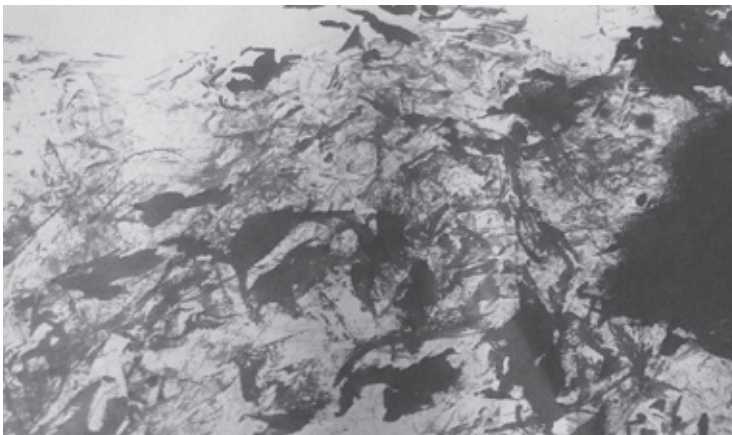
2017年5月からは東北少年院で月3回の授業も始まりました。そのころ青葉女子学園では人数が減り、授業は月1回となっていましたので、少年少女合わせて毎月4回という授業回数で現在も続けています。

初めて会った坊主頭の10名前後の少年たちは落ち着きがあり、少年というより青年に近い印象でした。さまざまな資格取得可能なこの少年院で出院後の就職を目標に頑張っているようで、素直で純粋そのものの表情で授業に臨んでくれるので、新鮮な驚きを感じます。

個性光る「シクラメンのある窓辺」「点描」

少年たちとの授業で特に印象深いのが、昨年12月から始めて、少年によつては今年の4月までかけて描いてきた「シクラメンのある窓辺」という題材による作品です。シクラメンを見せ、「シクラメンを窓辺に置いたら、窓の向こうにどんな風景が見えますか？」と投げかけ、シクラメンだけはリアルに描き、窓の向こうに見える風景は想像して描くのです。

少年たちは、憧れとしての里山、いつも目にしてきた海と船、実際の空を見ながら生まれた



授業中に参考作品として描いた墨絵（墨、和紙、新聞紙）

山と空、桜吹雪が描かれ風や音も感じる夜、邸宅の窓から夕焼けと出院をイメージする扉がある庭、海に沈む夕日、荒涼とした夜の海へと続くアンドリュウ・ワイエスを髣髴する草地、紫の夜空を翔けるサンタクロースと月の光で輝く海の波などを丁寧に描きました。

中には、この題材が気に入って、もう一度描きたいと点描で描いたり、4か月もかけて、さまざまな緑色を作って山や小川、草地を描き続けたり、JPOPが流れる街の上空から見ると星の宇宙空間、豊かな色彩による馬が走り続ける地球といった独創的表現も次々と出てきました。まさに無限の可能性を感じます。

表現と感性・少年たちと職員

昨年の6月でした。教卓に持参したミニバラを置くと、少年たちがさあっと集まってきました。口々に言うのです。「うわあ、可愛いですねえ。」「きれいだなあ。」「先生のバラですか?」少年たちがこんなにもバラを見て喜ぶとは思っていませんでした。非常に驚きました。

「小さな植木鉢のミニバラを玄関先に植えたら、どんどん大きくなったんですよ。今では、郵便ポストの高さ。だから、毎日届けてくれる新聞屋さんや郵便屋さんはポストを開けるたびに、このバラを見てるんですね。」と話しました。すると、Yくんが、「素敵なお話ですね。」と満面の笑みで言い、他の少年たちもここにこ顔です。

授業終了後、送迎を担当してくださっている職員のSさんにこのことを話しました。すると、

Sさんも素敵なお話をしてくれました。

「いやあ、バラはいいですねえ。実は、私の父は昨年亡くなったのですが、入院しているときにバラを持つていくと、それだけを喜んだんですよ。自然の持つ力っていうのを感じました。凄いものだと思います。」少年たちの感性の豊かさに感激した直後、Sさんの心の深さと感性に触れました。さらに、「ここにいる少年たちはすごいですよ。私があんな年齢だった時にはあんなに落ち着いて、大人じゃなかったです。彼らは素晴らしい集中力と能力を持っています。勿体ないです。」と、話すSさんなのです。

少年たちを指導する法務官は教育の仕事をしてはいますが、普通教育がゼロからのスタートです。その教育には深い思慮と高い品性がなければできないことと思います。

また、いつも授業を見守る職員の中にKさんという方がいらっしやいます。「シクラメンのある窓辺」を描く時には、「シクラメンのかほり」を歌いだし、くすくす笑う少年たちに、「シクラメンなら、この歌でしょ。」とすまし顔。描き進めていたA君の作品にはシクラメンに水やりするジョーロが描かれ、その前に小さなおじさんが立っています。「妖精ですか?」と尋ねると、A君は笑うだけでしたが、完成した時に、「この妖精おじさん、いい感じですねえ。」と話しかけたら、そばに立っていたKさんが、「実はそれは私なんです、私も描いて、と頼んだんですよ。」と。頑丈そうで威圧感さえ感じる大きな体格のKさんは少年たちに温かで優しいまなざしと心とませる言葉をかけています。作品

の題名を考えてくれたり、一年前の作品と現在を比べて、心理分析したり、目立たぬように授業のバックアップもしてくださっている貴重な存在です。

表現とは?少年の手紙より

「略・関先生に美術を教えていたいですますます(美術が)好きになりました。……略……今までは絵が下手だし、描くことが好きじゃありませんでした。でも先生が美術に興味を持ってませんでした。でも先生が美術を私に教えてくれました。先生の美術は、絵の上手さじゃなく、表現や感性といった、それぞれ一つは持っている表現力を引き出させてくれます。一見、形になっていない絵や模様でも、先生が感じた正直な思いを伝えて評価してくれました。絵を上手に描こうとするのではなく、自分にしか描くことのできない表現というか自分自身の絵を描くことが大切なのだと、気付かされました。人がいいの、悪いのかじゃなく、その人の良さや欠点を見てあげることが大切だと、生活にも置き換えて考えることができました。ただ絵を描くだけではないので、毎時間毎時間とても充実した楽しい時を過ごさせていた、ありがとうございました。……略」

出院した少年から手紙を頂戴します。そこには感謝だけでなく、表現について深く掘り下げている言葉もあり、恐縮しながらも少年院で授業をできることに幸せを感じていますが、もっともっと広い視野からの確かな言葉をかけていけるようになりたいと思う日々です。

(東北少年院・青葉女子学園美術講師)

子どもが歌に夢中になる時

柴田 あゆみ

4歳児のカブト組。19人の子ども達と4月に出会った。以下、子どもの名前は仮名です。

4月は散歩でよく見かける『ラッパずいせん』の歌が好きになった。また散歩先で捕まえた『だんごむし』の歌にも夢中になった。ダンゴ虫に触れない子が多く、散歩先で見つけたダンゴ虫をクラスで飼ってみることにした。ある時私が時々口ずさんでいた『だんごむし』の歌を、それまで歌う姿をあまり見せたことのないゆうたくんがダンゴ虫を触りながら「♪だんごむちだんごむち」と歌っているのを聴き、この歌を渡してみることにした。絵本や紙芝居から広がるダンゴ虫の世界と共に『だんごむし』の歌も好きになり、いつの間にかみんなダンゴ虫に触れるようになっていた。そんな子ども達を見て「今年度は子ども達が好きになったもの、歌いたくなった歌をひろって生活や歌をつくっていきましょう」と思った。

5月。4・5歳で行った塩竈神社の池でカエルの声を聴き、みんなで探してみたが見つけれなかった。その日の昼寝の時、私が『あまがえるの歌』を口ずさむと、まりちゃんが「その歌うたいたい！」と言った。次の日にこの歌を

渡すと、子ども達はこの歌の伸びやかさことばの響きにすぐに飛びついた。また別の日、グランドに震災後初めておたまじゃくしがいたと聞きつけみんなで行ってみた。おたまじゃくしは見つけられなかったが、カエルを3匹見つけた上に、長いシマヘビも見えました。次の日から「カエルごっこ」に夢中になり、カエルの餌のクモやヘビになる子もいた。求愛するきれいな声をきくと子ども達も「♪りりりりりろろろろ…」と大合唱していた。カエルが卵を産み、オタマジャクシにかえり、足が生えた頃『カエルの豆太』の歌を渡し、ペープサートで作った劇を見せた。そこからまたカエルの世界が広がっていった。

6月は星の世界にどっぷりつかかった。星座の話聞くのが大好きで、プラネタリウムに行つてからは、部屋のカーテンを閉め切つての「プラネタリウムごっこ」やギリシャ神話の「ペルセウスとアンドロメダ・おばけくじらごっこ」が楽しくなった。散歩先で見つけた「流れ星(石)」を「夜になったら光ってるかも」と大切にしまつたり、石の中を見たいと用務員さんに借りたトンカチで割つてみた。星の絵を部屋の



(月の船のうた)

壁や天井に飾り、布団に入ると誰かが『星めぐりの歌』を歌い始め、暇さえあれば星の図鑑や絵本をひっぱり出して、友達と頭を寄せて見たり、一人でじっくり見るようになった。

■ゆうくんの姿

ゆうくんは少し認識面が心配な子だが、カエルやおたまじゃくしの絵本が大好きになった。絵本を見る時に1番前に座り、私がページをめくることに「どうしたの?」と話の内容を分かったくて聞く姿が出てきた。毎日のように「カエルごっこちよ」と言うようにもなった。ある日の散歩で、ゆうくんがたかちゃんと「一番後ろで歩きながら『あまがえるの歌』を歌い始めた。歌詞は所々違っていたけれど、二人とも大きな声で歌う姿は初めてで、保育園に着くまで何度も繰り返し歌っていた。

6月末には友だちより少し遅れて星が好きになり、「おぼけくじら、つくったよね。」とみんなで作った星座の絵を指さしたり、早く星の本が見たくて大急ぎで給食を食べたりするようになった。「月にいった小さなジャン」という絵本を読んだ日には、絵に「ゆうのはしご。パバのはしご。」と長いはしごを描いてきたので「どこにいくの?」と聞くと「ちゅちゅ (宇宙)」と答えた。そして立ち上がってプラネタリウムでもらった春の星空と太陽系のポスターを指さし、「これはゆうのいるちゅちゅ (地球)」と言った。夕方、お迎えにきたお父さんにそのことを話すと「家でもずっと星の歌を歌っているんです。だから私も地球や木星のことを話してきかせてるんですよ」と教えてくれた。

この間まで、絵本を逆さまに広げてたゆうくんが、星の世界が大好きになりどんどん吸収しているのだ。言葉も、4月は私のことを「あゆみ」ではなく「ぼぶみ」としか言えなかったのが「星めぐりの歌」をはっきりと歌っている。

リズム表現でも自信がないのか時々座っていたが、6月のある日、リズム表現が次へと変わること「これはどうしたの?」と聞いてきた。そして公開保育では足元を見てツーステップをする姿を初めて見た。

■れんくんの姿

れんくんは4月あった当初、動きが止められず、お昼寝の時は部屋や廊下を走り回り布団になかなか入ることができなかった。友達との関わりも、嫌なことをわざとしては、止められると笑ってなかなか話を聞けないという姿があっ

た。

でもれんくんの行動や表情をよく観ていると、友達と関わりたいたからこそちよっかいを出したり、本当はみんなの中にいたいけど上手くできないからこそふざけてごまかしているのだということがわかった。本当はみんなの中にいたい。友達と関わりたい。という願いを受け止め、自分で止められない時は止めに入りながら、関わり方を教えたり、相手の思いを気付けさせる働きかけを大切にしていた。

5月中旬、れんくんもカエルの世界が好きになった。みんなとのカエルごっこに夢中になり、みんなの中で遊ぶ姿が出てきた。初めは大人が間に入り遊びや友達との関係をつなげたが、「一緒に遊びたい」と自分をコントロールして友達と関わって遊べるようになっていった。

そして、それまで絵本の時間は絵本の前を歩



(カエルの豆太)

き回ったり大きな声を出したりしてみんなの邪魔をしていたが、『999ひきのきょうだい』というカエルの絵本が好きになり、座って見る姿も出てきた。

歌う姿も変わってきた。これまで歌う時はみんなの間を走り回るか、大きな声を出すか、ホールからいなくなってしまうれんくんだったが、5月のある日、布団に入るとれんくんが「だんごむしの歌を歌って」と言ってきた。私の歌をじつと聴いて「もう一回」と何度もリクエストし、くりかえしの歌詞が少しずつれんくんの中に入っていた。7月には『星めぐりの歌』が好きになり、「とごろつてなに?」「きた(北)につてなに?」と一つひとつの歌詞の意味を聞く姿が出てきた。みんなと同じように並んで歌うことはまだ難しいが、ピアノを弾く私の隣に座って歌ったり、歌う私の前にくっついて歌ったりする姿が出てきて、歌の輪の中に入ることができた。

4月からの子どもたちの変化は、夢中になるものがあつたからこそたと今振り返って思う。大人の思いや形に子ども達をはめるのではなく、子ども達の姿から夢中になれるものを見つけ、一緒に音楽や生活を広げていくことをこれからも大切にしていきたい。

そして、子どもが「夢中になるものを見つける瞬間」や「変わりたいと思う瞬間」「自信へとつながる瞬間」を逃さず捉え、子どもの力を引き出していく、そんな保育をしていきたいと思う。

「僕らの夏休み Project」

藤岡 しほり

「僕らの夏休み Project」（以下：僕夏）は2011年、東日本大震災をきっかけに立ち上がりました。震災当時は、様々な理由により子どもたちが大人に気を使って遊んだり、また、自由に遊べないという状況が続く、寂しい思いを抱える子どもが多くなりました。そこで私たち大学生が、子どもたちにとって甘えられる、そして憧れられるお兄ちゃんお姉ちゃんになり、笑顔を届けようというプロジェクトが始まりました。僕夏のビジョンは「すべての子どもたちが夢や希望を持ち笑顔で過ごせる社会の実現」です。そのビジョンを達成するために行っているのが、毎年継続して岩手の小学校を訪れ、子どもたちに笑顔をお届けすることです。8年目となる今年度は全18大学、約420名の学生がチームに分かれ、29の小学校を訪れました。私たちが岩手に滞在する期間は1週間。その中で子どもたちと交流するのはたったの3日間です。しかし私たちはこの3日間のために1年間準備を重ねています。毎週、大学ごとに行われる会議に加え、月に1回、全大学が集まる会議もあります。そこでは普段は聞けない他の大学のメンバーの想いを聴いたり、多方面で活躍され、僕夏を応援してくださる企業や団体の方々からレクチャーを受けたりして学生のさらなる成長を目指しています。

私は今年の春、上智大学に入学し、僕夏に出会いました。上智大学が交流させていたたいているのは山田南小学校放課後児童クラブの子どもたち。今年は私にとって初めての交流でした。わからないことが多い中で準備は大変なことも多かったですが、子どもたちに笑顔届けたい！という一心で、取り組みました。3日間交流の予定でしたが、残念ながら台風の影響で2日目は中止になってしまいました。ですが、私たちが考えた、大学生がいるからこそできる、非日常を味わってもらえるような遊びで、たくさんの子どもの笑顔を見ることができました。交流中、一番感じたことは子どもたちの笑顔には不思議なパワー

がある、ということ。見ていただけで自然と私も笑顔になり、その笑顔がどんどん伝染し、気づけば周りのみんなが笑っている。そんな場面を何回も目にしました。これからもその笑顔の輪を広げ、いつかビジョンに掲げている「すべての子どもたち」が笑顔になる日が来るようにまずは目の前の子どもたちに全力で笑顔届けたいです。今年の反省点はたくさんありますが、その反省は来年に活かし、今年よりも来年、来年よりも再来年がさらに良い交流となるようにこれからも僕夏メンバーとしての自覚をもって活動していきたいと思っています。

また、僕夏は地域のお祭りにも参加させていただいています。腹帯、赤前、田老、大槌と会場は4つに分かれていて、上智大学は大槌の波板海岸ビレッジで行われたお祭りに参加しました。お祭りでは地域の方と関わり、その地域の良さをたくさん発見できます。短い滞在期間の中で、1日でも地域の方とお話したり、同じ空間で時間を共有できるのことも嬉しく感じています。ここでは僕夏メンバーとして、ヨーヨー釣りや髪飾り作りを行い、幅広い年代の方に楽しんでいただけました。地域の子どもたちやミュージシャンによるステージも素晴らしい、私たちが披露したソーラン節も大成功に終わりました。ホタテや牡蠣など岩手の海の幸もたくさんあり、地域の方々の温かさを感じ、「また帰ってきたい」と思える場所になりました。最後に打ち上がった100発の花火は、夜空だけではなくそれを見た多くの人の心も照らしてくれたと思います。1年間、子どもたちのことだけを考え、この夏のためにがむしゃらに走ってきたメンバーと見る花火は今まで見たどんな花火より美しく、深く心に刻まれました。

（上智大学学生）



（写真2枚は保護者の了解を得て掲載しています。）



後期高齢者の私。出会った先生は数多いが特に小学校時代の先生については記憶も薄らぎ、判然としなくなっているのが実情だ。とは言え今回、敢えて心に残っている残像を照らしてみることとする。

時は1954年。浮かび上がるその先生とは、小学校5、6年のクラス担任の伊藤保先生である。先生は当時、私の見立てでは20代なかば。幕別小学校（帯広市に隣接する幕別町の学校。各学年4クラス）に転動してきたばかりの独身の先生であった。

最初の挨拶で、「先生はピアノが弾けないから音楽の授業では皆さんに迷惑をかけるかも知れない。でも弾けるよう頑張るからよろしくお願いします」と語っていた。私は、その時、音楽が好きだったので、ピアノを弾けない先生がどう音楽の授業をするのかと心配し、不安を抱いた。ところがである。ある時、先生が放課後講堂においてあるピアノでひたむきに練習している姿を目撃した。私はその場に近づき、「先生、なぜ練習しているのですか」と尋ねた。すると、少しはにかむような笑顔で「あのね、

わたしの出会った先生 23

いじめっ子の途からの脱却へ

酒井孝夫



音楽の授業に備え、みんなで歌うとき、オルガンを弾けるように先生なりに努力したいから練習しているのさ」と答えてきた。それを聞いた私は、ずいぶん真面目な先生だなあ！と大いに感心したのであった。

そうした5年生1学期の初夏の頃である。私は学期初めにクラスの学級子供会生活部長」に選出され、学

状であった。そして、それは、先生が教室に入る前に、ざわざわとした雰囲気や伴いながら回覧されていた。そこに伊藤先生が入室してきた。結局、その回状はある女子学友の直訴で露見したのであった。

伊藤先生は、その回覧状を目にした時、あだ名の「ゴリラ先生」の如く、目をカッと見開き、顔を歪めた。

ジメようと呼びかけているが、逆に同じことを誰かに言われたら君はどう思うか。手が汚れているというのも、きれいに洗う暇がA子さんにはなかったかも知れないのでは。そのことを心配して一緒に手洗い場に連れていく、それが生活部長ではないのか。このようなイジメの呼びかけを君のご両親やご家族は喜びますか」と優しい目つきになって語りかけてくるのであった。

私は、涙を流しながら「僕が間違っていました。Aさんに謝り、学級の人々にも謝ります」と誓った。その頃、なにかと増長していたのであったが、この事件ですっかりと目覚めたのであった。

校から任命書を渡されていた。

ある日のこと、学級会の始まる直前にある女の子(A子さん)に対する、今で言う「集団いじめ」の呼びかけ文を書き上げた。その主旨は「A子はいつもきたない服装で登校してくる。手も足も、いつも汚れていて洗っていない。皆でA子が学校に来られないようにしよう!」というもので、いわば人権無視の大問題になる回覧

しかし、必死に普段の顔に戻し、静かに言った。「皆さん!先生は酒井君とこの手紙について2人で話し合いをするので、申し訳ないが1時間くらい、先生が戻るまで自習してくださいください」と言い、私を促して学校の宿直室につれていった。その宿直室で1時間くらい、こんこんとお説教されたのである。「酒井君、A

この先生の説教のおかげで、道を踏み外さずにすんだと、いつも感謝しつつ、忘れられない恩師として思い出すのである。「大人になって先生を訪ねてくるときは酒の1升瓶を持って来るのだぞ!」という6年生の卒業時の言葉と共に。故伊藤先生に合掌。

(宮城県退職教職員協議会)

小さな幸せを見つける

石澤梨沙

私は、6年生の学級担任をしている。昨年度までの2年間は、特別支援学級の担任をしていた。それ以前は、ずっと通常学級の担任だったが、「特別支援で子どもと関わると、見方が広がるよ」という先輩の話聞いて、経験してみたいと思い、担任を希望した。特別支援学級の担任になった年度当初は、児童の実態に合わせて、かなり自由にカリキュラムを組めることに驚いた。子どもに合わせた指導を一から自分で考えると、何が大切で何を身に付けさせたのかを深く考えざるを得ない。例えば、この地域で自立して生活するには、車がないとどこに行くにも不便だ。漢字を含んだ文が理解できれば、運転免許のテストを合格する可能性は大きくなる。漢字が読めるようにさせたい。意味が分かるようにさせたい。文章を読めるようにさせたい。自立するには、仕事ができなければならない。職場や近所との関係ができ、助け合えた方が、仕事を続けられる可能性は大きくなる。人と関わるための挨拶、自分の気持ちを伝えることができるように指導しよう。一つの活動と将来へのつながりを、とても大切に思えるようになった。

今年度、特別支援学級のその子どもは、協力学級として関わっている。休み時間になると、6年生の教室によく来て、私に出来事や気持ちを伝えようとす。そこには、通常学級の6年生の子どもたちもいる。すると、自然と子ども同士で話すようになる

し、お互いの新しい面を見つけることができるようになってきた。嬉しい。担任はしてなくても、環境を作ったり、何かしらで関わったりすることがよい方向へ向かうのだろうと感じている。

担任している6年生は、昨年度まで、特に勝ち負け（結果）にこだわりすぎていた。お楽しみ会のキックベース後半、「点数数えてないって？ はあ？」「こっちの勝ちだし！」「いや！ 数えてないから、負けてねえし！」という言い争いをして終わることもあった。この子たちは、色々な楽しさを見つけていないのか。なんてかわいそうと、思いながら見ていた。

私は、子ども達が将来、幸せだと感じて生きられるための教育をすることが何よりも大切だと思っている。だから、幸せだと感じる方法を学んでほしいと思う。幸せっていうと、「テストでいい点が取れた」「逆上がりができた」「試合に勝てた」など、達成されたことへの、その場の一瞬の幸せが思い浮かぶけれど、それはけっこう忘れやすい。できることが次々と、ずっと感じることは難しい。そうではなく、いつでも感じられる幸せを見つけれたらいいと思う。あの人のためになりたい、こんな人になりたい、こんなことができるようになりたい、そんな夢や遠い目標へ向かっていく過程に感じる小さな幸せを見つけてほしい。試合でいいプレーしたとか、応援したりされたりしたとか、今の自分は、望ん

でいる方向に向かっている、向かおうとしているなんてことも幸せだと気付いてほしい。

今年度、授業や子ども達と接するときを意識しているのは、「テストの点数が全てではない」ということだ。入試や試験を考えると、「テストの点数が全てだ!」といえるかもしれない。そのためか、学校の勉強ができることが、人の価値と同等のように感じている子どもも多いように思う。勉強を通して分かってほしいのは、違う意見や価値観を受け入れる考え方や、様々な困難を克服するための気持ちやスキルだと思う。これは、将来、どこでどんな生き方をしても、役に立つ力だろう。だから、音楽とか体育、図工とか、どの教科もできるだけ子どもが楽しいと感じる瞬間を作りたい。それによって、(算数は苦手だけど、音楽が楽しい!)と感じれば、大人になっても音楽鑑賞を楽しんだり、音楽を通して色んな人と関わったりすることが楽しいと思えるかもしれない。子どもの可能性を伸ばすために、少しずつ苦手は克服したい。だから、今は英語もがんばろうと思う。

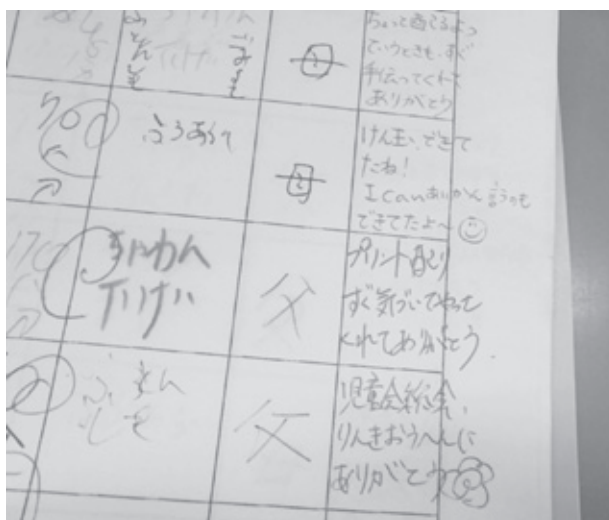
その他に、日々、教員として一人ひとりを見取って伝えることが必要だと思っている。私は、家庭学習カードの「担任からの欄に、その日の子どものいいところを書いていく。「体育の準備、進んで手伝っていたね」「発表のとき、前より声出せていたね」「字を写すのが、時間内に終わるよ

うになったね」「眠そうだったけど、寝ないように頑張っていたね」なんて、本当にちよつとしたことを、毎日一人ひとりに書く。これを話すと、「すごいね」と言われることもあって、嬉しい。けれど、どの教員も見取っていることを、私は書いているだけだ。特に頑張ったところやちよつと頑張っているところ、前よりちよつとできるようなったことなどを見ていると、おそろしいほどたくさんある。そして、できれば、子どもが間違えたり失敗したと感じたりしたことについて書く。「挑戦したこと、がんばらした」「勇気がある」「新しい考えに気付けた」全力を出して間違えたり失敗したりするのは、本当にすごい。間違えることも、いい方向に向かっているのだから、いいことだと感じられる子どもがたくさんいたら、何て楽しい学級なのだろうと思う。

また、今年度は「ひみつノート」に取り組んだ。どんなものかと言うと、週3回、朝、自分以外の誰かの名前が書いてあるミニノートが配られる。そのノートの人を1日、ひみつで観察する。そして、帰りの会までに、その人のいいところをノートに書いておくのだ。帰りの会では、自分のノートを読むことができる。最初は、(1週間に1回くらいかな。)なんて、考えていたけれど、子ども達から「もっと書きたい!」という声があがり、1週間に3回になった。これは、私が出張のため不在でも、私が忘れていても、子どもたちが進んで行ってい

る。読んでみると、そんなにくさんのことは書かれていないが、嬉しいのだろう。楽しいのだろう。帰りの会では、笑顔で読んでいるし、書いた内容とても盛り上がり、文章がとても短く、笑えるイラストを一生懸命描く子どももいるし、いいところを見つけれなかったと相談しにくる子どももいるが、それでも楽しそうに取り組んでいるところを見ると、いいかなと思っている。

これからも、様々な人と出会って学び、私ができることはどんどん進んで挑戦していきたい。子ども達だけでなく私も、望んでいる方向に向かおうとしている、向かっているということへの幸せを感じて、日々、子ども達に接していきたいと思う。そして、そんな夢や遠い目標へ向かっていく過程に感じる小さな幸せを、これからも大切にしていきたい。



(登米・新田小)

ていませんか

みやぎ教育相談センター

松 谷 三喜子

この度、仙台市では、「(仮称)仙台市いじめの防止等に関する条例骨子案」に対するパブリックコメントを募集しました。多くの市民の意見を言いながら、果たしてどのぐらいの意見が集約されたのでしょうか？ 条例制定の理由として、「いじめの防止、早期発見、早期対応を学校現場にさらに浸透させ……未来を創る子どもたちの笑顔のために……」とあります。条例制定も大事なことです。学校が多忙化し、失われてしまった本来の学校を取り戻すことが必要だと思います。親が安心して子どものことが相談できる学校、子どもたちが安心して仲間と共に成長できる学校こそが、今、学校に求められていることではないでしょうか。

相談の中に保護者の学校不信と思われる内容の相談が少なくありません。その多くは、我が子が弱者の立場であり、親も悩みを抱えながらも、うまく担任や学校側の理解や支援の手がもらえない。子どものためにどうしていったらよいかというような相談です。

からだにハンディを持つAさん

体に軽いハンディを持っているため、幼稚園のころより、手先を使う作業が遅くて苦手、集団行動も苦手、集団になじめず、小学校入学の際から、担任に配慮をお願いしてきた。しかし、3年でクラス替えがあったが、2年生まで仲よくしていた友達とは離され、今まで意地悪

をされてきた子や、よく知らない子たちと同じクラスになり、子どもは孤立感を感じている。また、新任からも配慮の様子が見られず、帰宅後家族にイライラをぶつけるようになった。今まで学校にお願いしてきたことは無意味だったのか、担任同士の引継ぎはなかったのか、と親も不安感が募っていました。子どもから様子を聞くと、運動機能が弱いため雑巾がけが上手にできないので、反省会で毎回さぼっていると名前を挙げられたり、給食時には机を離されたり、体調が悪く早退すると、クラス内で悪口を言われるなどの話をしてくれました。また、放課後同級生同士との会話や遊びの様子を見ていても、わが子が馬鹿にされているように感じ、親として腹立たしく悲しい思いをしていたとのことでした。相談を受けて、子どもが抱えている辛い状況や様子を共有することが大事なので、担任とよく話し合うことや、身体のハンディキャップも抱えているので、養護教諭も交え、率直な親の思いを伝えることを勧めました。定期的に電話で経過を報告していたが、担任と話をしても保護者の納得のいく対応がないまま経過し、また新学期への不安を抱えています。親の願いは、子どもが安心して、楽しく学校生活が過ごせることなので、いじめを助長するような対応は黙認せず、管理職への相談も必要ではないかと勧めました。

モンスターペアレント扱いされ警戒されたBさん

不登校ぎみになってきた子どものことで、担任に電話で連絡と相談をしていました。子どもの話を聴いただけでは確かな情報は得られないと思い、その都度電話をかけているうちに、電話を受け取る教頭先生からもよく思われず、問題の多い保護者として学校側から敬遠されるようになったそうです。子どものちょっとした変化や態度に過剰に反応し、すぐに解決してやらなければという親心が気を焦らせ、冷静な対処ができなかったようでした。学校の先生方は多忙で、特に朝は保護者からの連絡等で電話が込み合う時間帯でもあり、急を要する要件以外はなるべく連絡帳など紙面で連絡し、場合

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき9時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

学校が遠い存在になっ

によつては直接面談を申し込み、心配な点や、気になることを相談していくことを勧めました。親自身も学校や地域となく、疎外感や孤独感を感じている様子でした。このような親子に対し学校は、拒否するのではなく親身になって手を差し伸べていくことが求められています。

発達障害を抱えたCさん

学校から特別支援学級入級について相談があるとされた。4歳児のときに発達障害と診断され、現在2年生で通常学級で過ごしている。学習面では、文字や計算の覚えも早く、歌やピアノ力が大好きだが、ことばの理解、運動やルールのあるものは苦手である。生活面では、大きなこだわりはなく、友だちとのトラブルや行動面で特異なこともなく毎日楽しく通学しており、本人にとって目立った困難はないと親は認識していた。学校としては、将来的に本人が困るのだから早期に個別対応をしたい意向のようでした。支援学級の授業や生活の様子を見学したが、今の状況では子どもの実態にそぐわないし、通常学級より質の高い個別対応ができるかどうか疑問であるというのが親の感想でした。複数の専門機関にも相談したが、急がなくともよいのではないかと言われたそうです。親としても常々、子どもにとって最善の方向に進めたいと考えているが、その時期が今なのかと悩んでいます。そのあと突然、「入級承諾

書」を書いてほしいという連絡がありパニックになったようでした。ご両親で話し合い、学校にも親の意向を伝え、子どもにとって最良の決断をしていくことを勧めました。

障害や配慮を必要とする子どもたちを持つ親は、子どもの日々の成長や変化に一喜一憂しながら生活しています。子どもも支援と同様、親へのサポートも大事にしていく必要があるのではないのでしょうか。学校や家庭での様子について連絡を取りながら、年に1、2回は共通理解のための情報交換をし、相互の信頼関係を築

くことが大切だと思います。

子どもの学校生活での悩みや、心配事が自分の学校に相談できず、困り果ててセンターに電話をしてきます。相談を受けるものとして感じていることは、親は子どもの問題や課題、親の悩みを理解し、共に考えてくれる相手を求めているという事です。学校がもっと身近に相談できるように門戸を開いてほしいと願います。そのためには学校現場の多忙化解消と少人数学級の実行など条件整備が不可欠だと思います。

《センターからのお知らせ》



『教育が、国の枠づけてしか考えられぬ時代があった／授業も教科書絶対の画一注入／教えるものにも学ぶものにも、自由がなく／権力に盲従する教師たちは／子どもたちの前に、自らも絶大な権力者として振舞い／いささかの疑念も反省もない時代である』

『教育が、国の枠づけてしか考えられぬ時代があった』のほとんどが20代の青年教師だったことです。しかし、その一方で、実践者たちの中には、検挙され獄中の生活を余儀なくされた方や、その機関誌や文集が発行停止に追い込まれたものも数多くありました。

冒頭の一文は、1981年に北方教育運動の記録をまとめた『東北の教育的遺産』という本の中に、東北地方の教師達によって「北方性教育運動」が産声をあげ、その「生活綴力運動」は、全国的な注目を評価を得ることになりました。驚くべきことにその教師たちのほとんどが20代の青年教師だったことです。しかし、その一方で、実践者たちの中には、検挙され獄中の生活を余儀なくされた方や、その機関誌や文集が発行停止に追い込まれたものも数多くありました。

このような思いから、本書『東北の教育的遺産』を発行しました。当時の青年教師の生き方や考え方を、たくさんの方が学べるだろうと考えたからに他なりません。ご希望の方は、みやぎ教育文化研究センターまでご連絡ください。



おすすすめ映画

『ひまわり』 ～沖繩は忘れない、あの日の空を～

ボクは沖繩が好きだ。沖繩に救われたことがあるからだ。2006年11月に病休中だったボクは、病院の先生から「旅行にでも行ってみたら？」と言われた。その時にできるだけ遠くに行きたいと思ったボクは、迷わず沖繩を選んだ。仙台空港から最も遠くに行ける国内の地が沖繩だったからだ。訪沖して、南部戦跡を巡って沖繩戦の悲惨さに衝撃を受け、沖繩特有の食べ物やなかなか日が落ちないことにカルチャーショックを覚え、結果この沖繩訪問が気分転換にもなり、年明けから復帰できた。沖繩に行かなければ、復帰はもつと先になっていたはずだ。ボクにとつて沖繩は命の恩人のようなものだ。



だから、映画『ひまわり』も沖繩が舞台と知り、すぐ見に行くことにした。沖繩は、青い空と「ひまわり」がよく似合う。映画では、宮森小の聡子先生が戦争で亡くなった級友のお父さんからもらったヒマワリの種を教え子たちと植える。きつと「ひまわり」は希望の象徴だったに違いない。その花が見事に咲いた頃に、宮森小への戦闘機墜落事件は起きた。あの沖繩戦から14年後のことだ。それから、さらに45年後には沖繩国際大学に墜落事件が起きる。映画は、沖繩戦を経験した祖母、宮森小の事件を経験した良太、その孫で沖繩国際大学に通う琉一。その琉一が、大学のゼミ仲間とともに二つの墜落事件を調べることになった中で様々な葛藤から、沖繩が背負わされている過去と現実と未来について見つめる困難と希望を見る者に訴えかけてくる。

ボクはこの映画を見るまで、米軍機が墜落した宮森小のことは全く知らなかった。その後、どうしても訪問したくなり、現地に飛んだ。幸運なことに事故当時、宮森小の児童だった方から直接お話を伺うことができた。ボクが救われた沖繩に、こんなにもひどいことがあったなんて。それを今でも伝えようと、未来のために奮闘している方がいる。ボクにとつての沖繩は観光だけでなく、自分の生き方を確かめる場になっている。今すぐにでも、沖繩に行きたい……。

(鈴木 吉雄)

センターの動き

7月

- 2日 上杉山小に道徳授業の参観に行く
- 3日 市民の会「いじめ防止条例」に対する要望書提出と記者会見
- 6日 春日先生と「東北の教育遺産」の原稿作成の打ち合わせ
- 7日 午前中、東北民教研事務局会議
- 9日 ゼミナール勉強会。夏のこの一講座案内発送作業
- 10日 市民の会事務局会議。夏休みこくご講座案内の発送作業
- 11日 つうしん92号別冊編集委員会
- 13日 事務局会 つうしん91号発送作業
- 15日 道徳と教育研究会
- 17日 東北大学へつうしん91号を届ける
- 21日 「教育」読友会、7名参加
- 24日 午前、夏休みこくご講座打ち合わせ。午後、山岸さんを講師に仙台市いじめの防止等に関する条例骨子案についての学習会
- 25日 午後、野田正彰さんの講演。夜、第4回『道徳なやんでるたーる』実施
- 27日 午後、事務局会議
- 31日 朝日新聞の石橋記者と中森さんの取材に同伴。「東北の教育的遺産」校正終わる。つうしん92号の編集方針決定

- 8月
- 1日 「東北の教育的遺産」脱

- 稿 秋の郷の佐藤さんへ最終校正原稿渡す
- 3日 第1回夏休み国語講座(30名参加)
- 7日 民教連作業総まとめ
- 8日 市民の会「いじめ防止条例骨子案」に対する声明書の検討。「東北の教育的遺産」完成・納品
- 9日 つうしん92号の執筆依頼、ほぼろ
- 10日 第67回東北民教研「茂庭集会」12日まで
- 20日 電話など問い合わせのあった方々への『愛憎録の頃の私』発送
- 24日 午前、千葉保夫さん来室、東北民教研の報告文などについて打ち合わせ。午後、事務局会
- 25日 「教育」読友会7名参加。新メンバーに研究者の淡路さん加わる
- 27日 市民の会、仙台市いじめ条例案に対する声明を出す。記者会見、並びに子供未来局と懇談。午後、つうしん特集のための座談会(中森・教員・久保)
- 30日 臨床教育学会のみなさん(田中孝彦さん、上田孝俊さん、筒井潤子さん)と、震災調査まとめについて打ち合わせ
- 31日 早稲田大学大学院生、笹島さん、日本教育学会の合間を縫って鈴木道太の研究のため来室
- 4日 秋のこくご講座準備会。次の教材は「てぶくろを買いに」と「大造じいさん」とがんに決定
- 8日 「教育」読者会、スタンダードとゼロトレランスを議論、並行して『道徳なやんでるたーる』特別編
- 10日 ゼミナール勉強会 19世紀から20世紀の教育史に入る
- 11日 市民の会事務局会、10月20日にいじめ問題学習会開催を決定。前事務局員の本郷さんの葬儀に参列
- 14日 第9回事務局会、高校生公開授業、通信93号の内容検討を中心に行う
- 18日 仙台市定例教育委員会傍聴
- 20日 つうしん92号鼎談原稿まとまる。高校生公開授業講師、加藤公明さんに決定
- 23日 道徳と教育研究会
- 25日 秋のこくご講座準備会。午後、みやぎ教育のつどい事務局会議。つうしん92号全ての原稿入る
- 26日 午前、市民の会事務局会。10月20日のいじめシンポ、並びに高橋哲哉さん講演会について打ち合わせ。午後、北村さんをつうしん92号の校正打ち合わせ
- 28日 事務局会、つうしん93号の特集企画を考える
- 28日 みやぎ教育のつどい実行委員会

- 稿 秋の郷の佐藤さんへ最終校正原稿渡す
- 3日 第1回夏休み国語講座(30名参加)
- 7日 民教連作業総まとめ
- 8日 市民の会「いじめ防止条例骨子案」に対する声明書の検討。「東北の教育的遺産」完成・納品
- 9日 つうしん92号の執筆依頼、ほぼろ
- 10日 第67回東北民教研「茂庭集会」12日まで
- 20日 電話など問い合わせのあった方々への『愛憎録の頃の私』発送
- 24日 午前、千葉保夫さん来室、東北民教研の報告文などについて打ち合わせ。午後、事務局会
- 25日 「教育」読友会7名参加。新メンバーに研究者の淡路さん加わる
- 27日 市民の会、仙台市いじめ条例案に対する声明を出す。記者会見、並びに子供未来局と懇談。午後、つうしん特集のための座談会(中森・教員・久保)
- 30日 臨床教育学会のみなさん(田中孝彦さん、上田孝俊さん、筒井潤子さん)と、震災調査まとめについて打ち合わせ
- 31日 早稲田大学大学院生、笹島さん、日本教育学会の合間を縫って鈴木道太の研究のため来室
- 4日 秋のこくご講座準備会。次の教材は「てぶくろを買いに」と「大造じいさん」とがんに決定
- 8日 「教育」読者会、スタンダードとゼロトレランスを議論、並行して『道徳なやんでるたーる』特別編
- 10日 ゼミナール勉強会 19世紀から20世紀の教育史に入る
- 11日 市民の会事務局会、10月20日にいじめ問題学習会開催を決定。前事務局員の本郷さんの葬儀に参列
- 14日 第9回事務局会、高校生公開授業、通信93号の内容検討を中心に行う
- 18日 仙台市定例教育委員会傍聴
- 20日 つうしん92号鼎談原稿まとまる。高校生公開授業講師、加藤公明さんに決定
- 23日 道徳と教育研究会
- 25日 秋のこくご講座準備会。午後、みやぎ教育のつどい事務局会議。つうしん92号全ての原稿入る
- 26日 午前、市民の会事務局会。10月20日のいじめシンポ、並びに高橋哲哉さん講演会について打ち合わせ。午後、北村さんをつうしん92号の校正打ち合わせ
- 28日 事務局会、つうしん93号の特集企画を考える
- 28日 みやぎ教育のつどい実行委員会

- 9月
- 1日 算数授業づくり講座2回目。くるくるマシオンをつくりながらかけ算の構造をどう教えるかを学ぶ。15名参加
- 10月
- 1日 きた出版へつうしんの2校渡す

(菅井)